

# 右

(能)

ツレ 長野 裕  
ツレ 笠間 啓

シテ 藪 俊彦

## 近

ワキ 北島 公之  
ワキツレ 平木 豊男

間 荒井 亮吉

大鼓 田中  
小鼓 住駒

一義 俊介

太鼓 麦谷清一郎  
笛 江野 泉

後見 高橋 右任  
松田 若子

地謡

米島 和秋 佐野 弘宜  
船本 嘉人 広島 克栄  
木谷 哲也 高橋 憲正  
田屋 邦夫 川島 英治

休憩 二十分

# 磁

(狂言)

## 石

すっぱ 炭

哲男

田舎者 炭 光太郎  
宿屋 鍋島 憲

後見 山田 讓二

# 網之段

(仕舞)

高橋 右任

地謡

藪 克徳  
渡邊荀之助  
佐野 玄宜  
佐野 弘宜

(能)

ツレ 酒井 章  
シテ 渡邊 茂人

## 島

ワキ 殿田 謙吉  
ワキツレ 平木 豊男

大鼓 飯嶋六之佐  
小鼓 住駒 幸英

笛 室石 和夫

間 中尾 史生

# 八

後見 渡邊荀之助  
福岡 聡子

地謡

寺田 茂 佐野 玄宜  
大澤 永靖 佐野 由於  
山崎 健 島村 明宏  
松本 博 藪 克徳

終了 午後四時三十分頃

## 能 右 近 (うこん)

常陸の国鹿島の神職たち(ワキ・ワキツレ)が都に上り名花を眺め巡って、今日は北野社の南右近の馬場を訪れます。春三月の花盛りとあって見物の車や輿が行き交うなか、向かいの木陰に立て寄せた女車がありました。今日は右近の馬場のひおりの日(五月五日・六日)ではありませんが、在原業平が女車に歌を詠みかけた伊勢物語の昔が思い起こされます。そう述べた神職と車の主(前シテ)は、言葉を通わせ心がなじんで花の友となります。桜葉の宮、紅梅殿、老松、一夜松、御輿岡と北野社の名所を教えた車の主は、末社の一つ桜葉の神(天照大神)を名乗り、月の夜神楽を待つよう言い置いて花陰に隠れました(中入)。神の影向を喜ぶ神職たちの前にやがて桜葉の神(後シテ)が現れ、君を守り塵に交わる神慮を示して花をかざした美しい舞い姿を月下に披露します。泰平の花の都をことほぐ神神楽は御池の水に映り、桜葉の神は桜の梢から雲を伝って大空に舞い上がります。

## 狂 言 磁 石 (じしゃく)

遠州見付郷から上京する若者が、大津松本の市で人売りのすっぱに目を付けられます。言葉巧みに石山詣でを誘い、坂の茶屋に連れ込んだすっぱは、茶屋の主人、じつは人買いに、若者を三百疋で売り渡す約束をします。眠ったふりで交渉を聞いた若者は、約束の明朝、堀越しに代物を受け取って遁走。寝過ごしたすっぱが太刀を振りかざして追い付くや、若者は磁石の精を名のってその太刀を騙し取ります。二度まですっぱがたらされました。

## 能 八 島 (やしま)

西国行脚を志す都方の僧たち(ワキ・ワキツレ)が春霞の浮き立つ船路を経て八島の浦に着きます。日が暮れて蜚の塩屋に宿を借りようとすると、漁翁たち(前シテ・ツレ)が帰ってきて都の人を懐かしみます。老人は僧の所望により、もてなしに源平合戦の有様を物語ります。その時の源氏の大將、義経の勇姿がまずは眼に浮かびます。続いて三保の谷と景清の鍛引き、継信や菊王の最期を次第に身振りも交えて詳しく再現します。あまりの詳しさに不審する僧に答えて老人は義経の名を暗示し、暁の修羅の時を待てと言いつつ消えます(中入)。二度目の夢を期待する僧の枕元に甲冑を帯した義経の幽霊(後シテ)が現れ、武者の宿命である瞋恚の妄執ゆえに生死の海に沈淪する身の上を恨みます。弓流しに佳名を惜しむ勇者は今もその美学に執着し、関の声や矢叫びの幻聴と共に海山が震動し雲波が打ち合う修羅の時が現出します。春の夜が明けるとそれは朝嵐の音でした。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十年五月六日(日) 午後一時始

(能) 田 村 (狂言) 水掛掬 (能) 胡 蝶